

ヨーロッパの近代美術

歴史の忘れ形見



Modern Art of Europe - Revival of Forgotten Works

Modern Art of Europe - Revaluation of Forgotten Works

ヨーロッパの近代美術

歴史の忘れ形見



平成9年1月7日[火]

▼
3月9日[日]

▼
宮内庁
三の丸尚蔵館

目次



あいさつ……	3
図版……	4
作品解説……	26
出品目録……	36
Foreword……	ii
List of Exhibits……	iii

凡例

- ◎本図録は、平成9年1月7日(火)から3月9日(日)までを会期とする展覧会「ヨーロッパの近代美術—歴史の忘れ形見」の解説図録である。
- ◎図録中の作品及び解説番号は、展示番号と一致する。ただし、参考図版掲載作品は展示されない。
- ◎会期中、一部作品の展示替を行う。
- ◎図版ページ及び解説文中等に用いた各国の国名は、出品作品制作当時の歴史的呼称である。
- ◎作品解説及び出品目録に記載したサイズの単位はcmである。絵画作品では、本紙部分のみを縦×横で表示した。ただし版画作品については、画面のサイズ(イメージ・サイズ)も併記した。立体作品の場合、Dは径もしくは奥行き、Wは幅、Hは高さを示す。
- ◎本展覧会の企画及び図録の執筆・編集は、三の丸尚蔵館学芸室研究員・大熊敏之が担当した。
- ◎写真は、松野正雄(宮内庁嘱託、コニカ(株))の撮影による。

あいさつ

三の丸尚蔵館の第14回展示「ヨーロッパの近代美術—歴史の忘れ形見」を開催いたします。

明治時代の幕開けから昭和戦前期にいたる間に、帝室(皇室)および宮内省には、東洋、日本の古美術品や日本近代の多彩な美術作品とともに、欧州各国との皇室外交での贈答や御慶事の際の献上、日本政府もしくは帝室からの制作依頼、御買上など折々の機会を通じて、西欧の絵画、彫塑、工芸作品も少なからずもたらされてきました。それらは、記録から知られるかぎりでは、時々の同時代作品、すなわち19世紀以降の近代作品で大半が占められており、その一部は三の丸尚蔵館の収蔵品のなかにも引き継がれて現存しています。

本展は、このような当館所蔵の西欧近代のさまざまな造型作品のなかから、調査の結果、作者や制作年等が確定され、しかも美術史的な価値を認めることができると考えられる諸作品をまとめて紹介しようとするものです。

もっとも、これらは、ヨーロッパの近代美術の流れを展望し得る体系的なコレクションというわけではなく、ロダンの彫塑作品などわずかな例をのぞけば、個々の出品作品の作者も今日では本国ですら歴史に埋没してしまった人物がほとんどといえます。しかし、なかには、19世紀イタリアの画家ジョ・バッタ・フェラーリや1910年代前後に活躍したロシアのボリス・クストージェフ、あるいはベルギー後期印象主義の絵画作品のように、ここ数年の間に各国の近代美術史上で急速に見直しが図られ、再評価がすすめられている作家の代表的な作品や、一時代の特定の表現傾向を典型的に示す美術・工芸品も含まれており、このような興味深い作品の数々を当館が所蔵していることを明らかにし、ご覧いただくことは有意義なことと思われまふ。本展を通じて欧州との交流史のなかでかつて日本にもたらされ、その後長く忘れ去られていた美術作品の魅力を再発見していただければ幸いです。

平成9年1月

宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 出品作品一覧 (第14回 ヨーロッパの近代美術－歴史の忘れ形見)

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	農村風景	ジョ・バッタ・フェラーリ		1875	p. 4
2-1	露西亜皇帝(ロシア皇帝：アレクサンドル二世)(締盟國元首肖像のうち)	ジュゼッペ・ウゴリーニ	一面	1875	p. 5
2-2	和蘭皇帝(オランダ国王：ウィレム三世)(締盟國元首肖像のうち)	ジュゼッペ・ウゴリーニ	一面	1875	p. 5
2-3	英吉利皇帝(イギリス女王：ヴィクトリア)(締盟國元首肖像のうち)	ジュゼッペ・ウゴリーニ	一面	1875	p. 5
2-4	葡萄牙皇帝(ポルトガル国王：ルイス一世)(締盟國元首肖像のうち)	ジュゼッペ・ウゴリーニ	一面	1875	p. 5
2-5	獨逸皇帝(ドイツ皇帝：ヴィルヘルム)(締盟國元首肖像のうち)	ジュゼッペ・ウゴリーニ	一面	1875	p. 6
2-6	白耳義皇帝(ベルギー国王：アルベール一世)(締盟國元首肖像のうち)	ジュゼッペ・ウゴリーニ	一面	1875	p. 6
2-7	伊太利皇帝(イタリア国王：ヴィットリオ・エマヌエーレ二世)(締盟國元首肖像のうち)	ジュゼッペ・ウゴリーニ	一面	1875	p. 6
2-8	丁抹皇帝(デンマーク皇帝：クリスチャン九世)(締盟國元首肖像のうち)	ジュゼッペ・ウゴリーニ	一面	1875	p. 6
2-9	瑞典皇帝(スウェーデン国王：オスカル二世)(締盟國元首肖像のうち)	ジュゼッペ・ウゴリーニ	一面	1875	p. 7
2-10	澳地利皇帝(オーストリア皇帝：フランツ・ヨーゼフ二世)(締盟國元首肖像のうち)	ジュゼッペ・ウゴリーニ	一面	1875	p. 7
2-12	佛蘭西大統領(フランス大統領：パトリス・ドゥ・マクマホン)(締盟國元首肖像のうち)	ジュゼッペ・ウゴリーニ	一面	1875	p. 7
2-13	瑞西大統領(スイス大統領：ヤコブ・シェラー)(盟國元首肖像のうち)	ジュゼッペ・ウゴリーニ	一面	1875	p. 7
2-14	秘露大統領(ペルー大統領：マヌエル・バルド＝イ＝ラバッリエ)(締盟國元首肖像のうち)	ジュゼッペ・ウゴリーニ	一面	1875	p. 8
3-1	伊太利皇帝(イタリア国王：ウンベルト一世)(締盟國元首肖像のうち)	アッキレ・サンジョバン	一面	1880頃	p. 8
3-2	亜米利加合衆国大統領(アメリカ大統領：R.B.ヘイズ)(締盟國元首肖像のうち)	アッキレ・サンジョバン	一面	1880頃	p. 8
4	牧馬	エンリコ・コールマン	一面	1870頃	p. 9
5	うちひしがれたカリアティード	オーギュスト・ロダン	一点	1880～1881	p. 10
6	台付花瓶	国立セーヴル製陶所	一点	1882	p. 11
7	菊銀杏文花瓶	国立セーヴル製陶所	一对	1908	p. 12
8	白熊文花瓶	国立セーヴル製陶所	一点	1920	p. 13-14
9	扇形衝立	国立ゴブラン製作所	一基	1918	p. 15
10	兵士の休憩	パヴェル＝オシボヴィッチ・コワレフスキー	一面	1896	p. 16
11	ヴォルガ河畔の乙女	ボリス・クストージェフ	一面	1916	p. 17
12	蓋付壺	エードヴァルド・ハルド	一点	1923	p. 18
13	ローマ聖ピエトロ大聖堂	フランソワ・バイク	一面	1921	p. 19
14	フォレスト遊園の雪景	アルベール・パケ	一面	1922	p. 20
15	赤被ガラス花盛器	ヴァル・サン＝ランベール・クリスタル製作所	一点	1924	p. 22
16	赤被ガラス花瓶	ヴァル・サン＝ランベール・クリスタル製作所	一点	1928	p. 23

17	台付花瓶	ドイツの工房？	一対	1939	p. 24
----	------	---------	----	------	-------

イタリア王国

THE KINGDOM OF ITALY 1870s



1 ジョ・バッタ・フェラーリ 《農村風景》(旧題:農業之図) 1875年 油彩・カンヴァス



2-① 露西亞皇帝(ロシア皇帝:アレクサンドル二世)



2-② 和蘭皇帝(オランダ国王:ウレム三世)



2-③ 英吉利皇帝(イギリス女王:ヴィクトリア)



2-④ 葡萄牙皇帝(ポルトガル国王:ルイス一世)



2-⑤ 獨逸皇帝(ドイツ皇帝:ヴィルヘルム)



2-⑥ 白耳義皇帝(ベルギー国王:アルベール一世)



2-⑦ 伊太利皇帝(イタリア国王:ヴィットリオ・エマヌエル二世)



2-⑧ 丁抹皇帝(デンマーク国王:クリスチャン九世)



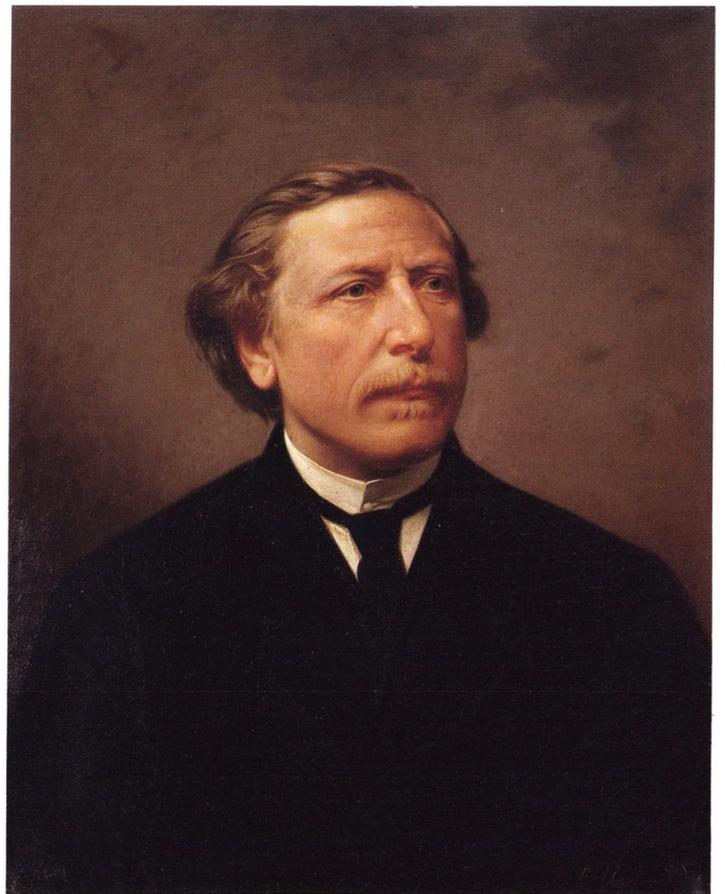
2-9 瑞典皇帝(スウェーデン国王:オスカル二世)



2-10 奥地利皇帝(オーストリア皇帝:フランツ・ヨーゼフ二世)



2-12 佛蘭西大統領(フランス大統領:パトリス・ドゥ・マクマホン)



2-13 瑞西大統領(スイス大統領:ヤコブ・シェラー)

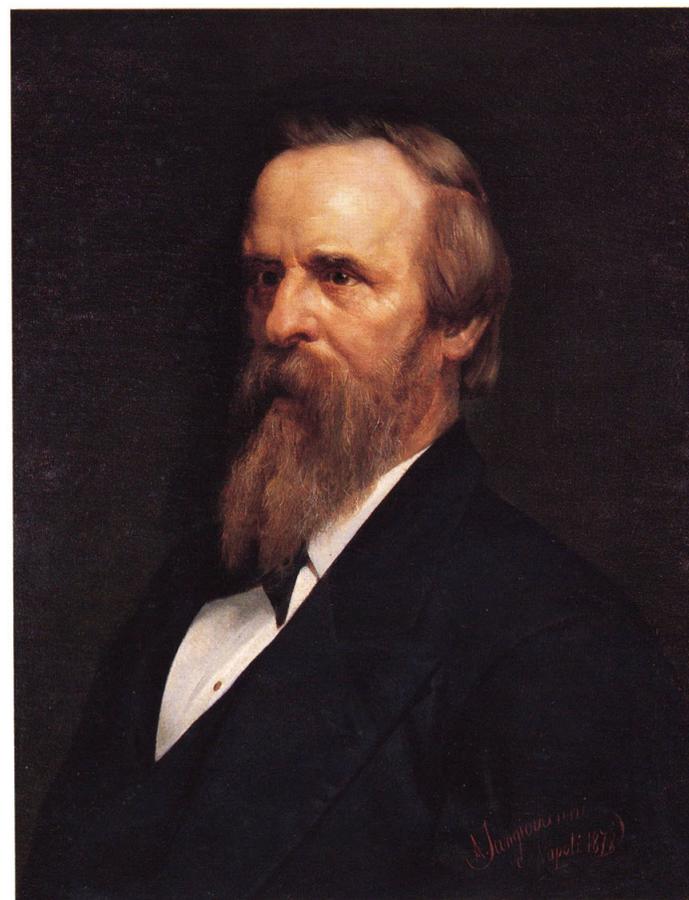


2-14 秘露大統領(ペルー大統領:マヌエル・バルド=イ=ラバッリエ)

3 アッキレ・サンジョヴァンニ 《締盟國元首肖像》 1880年頃 油彩・カンヴァス



3-① 伊太利皇帝(イタリア国王:ウンベルト一世)



3-② 亞米利加合衆國大統領(アメリカ大統領:R.B.ヘイズ)



4 エンリコ・コールマン 《牧馬》 1870年頃 油彩・カンヴァス

フランス共和国

FRENCH REPUBLIC 1880s-1910s



5 オーギュスト・ロダン 《うちひしがれたカリアティド》(旧題：女像置物) 1880～81年 ブロンズ



6 国立セーブル製陶所 《台付花瓶》 1882年 陶磁



7 国立セーブル製陶所 《菊銀杏文花瓶》一対 1908年 陶磁



8 国立セーブル製陶所 《白熊文花瓶》 1920年 陶磁



9 国立コブラン製作所 《扇形衝立》 1918年 染織・木

ロシア・ツァー帝国

THE TSARDOM OF RUSSIA 1890s-1910s



10 パヴェル=オシボヴィッチ・コワレフスキー 《兵士の休憩》(旧題:雪原野ロシア軍隊休憩の図) 1896年 油彩・カンヴァス



11 ボリス・クストージェフ 《ヴォルガ河畔の乙女》 1916年 油彩・カンヴァス

スウェーデン王国

.....
THE KINGDOM OF SWEDEN 1923

ベルギー王国

.....
THE KINGDOM OF BELGIUM 1920s

14 アルベール・バケ 《フォレスト遊園の雪景》 1922年 油彩・カンヴァス
[当館蔵—旧秩父宮家コレクション]

参考図版2 V.ピレンヌ=ケペンヌ 《アゼー城の入口》 1922年 油彩・カンヴァス
[御物]

参考図版3 ジャンヌ・ヌージャン 《リエージュの街》 1922年 銅版・紙 [御物]



15 ヴァル・サン＝ランベール・クリスタル製作所 《赤被ガラス花盛器》 1924年 ガラス・赤色ガラス被せ・カット



16 ヴァル・サン＝ランペール・クリスタル製作所 《赤被ガラス花瓶》 1928年 ガラス・赤色ガラス被せ・カット

ドイツ

GERMANY 1939

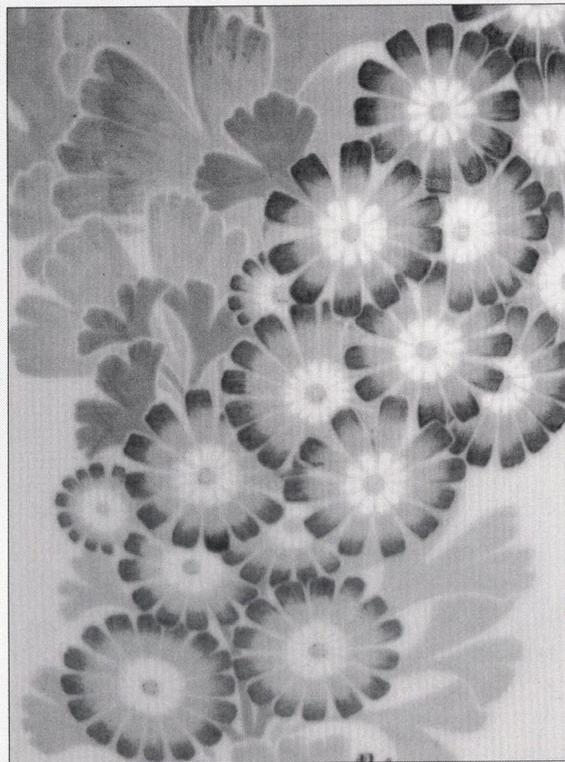


17 ドイツの工房? 《台付花瓶》一対 1939年 陶磁

作品解説



出品目録



作品解説

1 ジョ・バッタ・フェラーリ [1829～1906]

農村風景(旧題：農業之図)

1875年
油彩・カンヴァス 89.5×117.5
当館蔵

ブレスシアに生まれたフェラーリは、はじめ地元でアマチュア画家として活動したのち、27歳の時にミラノのブレラ美術学校に入学し、ジュゼッペ・ソーニの人物画教室に学ぶ一方、ドイツ生まれの風景画家アルベルト・ツィンメルマンから風景画描法の指導も受けた。同校には1860年に中途退学するまでの3年間で学したが、この間、1857年にブレスシアの、翌58年にはミラノの美術展にそれぞれ出品、入選している。以後、中退したとはいえ、各種の展覧会で入選を重ねていたことから、フェラーリは1860年頃から貴族ら多くの有力者たちからの作品依頼を受けるなど本格的な制作活動を展開しはじめることになる。しかし、その後の1862年から64年にかけての足跡については不明な点が少なくなく、一時期イタリア独立戦争に参加したのちロンドンに渡り、ついでニューヨーク経由もしくはロンドンから直接南米のアルゼンチンへ赴き、同地にしばらく滞在したのではないかと考えられている。1865年にミラノに戻ったのちは、再び意欲的に創作に取り組み、ウルビーノ王立美術協会名誉会員になるとともに、ミラノを中心としたイタリア国内のさまざまな展覧会に出品を重ねた。

このようなフェラーリの生涯と作品は、ごく近年までイタリアの近代絵画史のなかでもほとんど忘れられたままであったが、1990年にフェラーリを大伯父に持つロベルト・フェラーリによる初めての本格的なモノグラフィ（Roberto Ferrari, *Gio Batta Ferrari 1829-1906*, Grato, brescia, 1990）が刊行されたことと、最近の19世紀ロンバルディア画派等再評価の気運の高まりを受けて、ここ数年の間に急速に見直しがすすめられるようになっていく。そのロベルトのモノグラフィに収められているジョ・バッタ・フェラーリ作品目録によれば、フェラーリは1879年の国設ブレラ美術展に《日本の商人—アタンゴ》（出品No.84/Mercanti Giapponesi; Atango）、同年のトリノ博覧会には《イケガニの眺め（日本）》（*Veduta di Ikegani—Giappone*）という日本の風俗や風景をモチーフにしたと思われる作品をそれぞれ出品していることが確認される。この1879年頃の制作と推定される2点の日本関連の作品の図様がどのようなものであったかはあきらかではないが、本展で公開する《農村風景》もまた、紛れもなく日本の農民の姿を画中に登場させていることから、あるいはこれら3点の作品は制作の動機や目的などの点で何らかの関係があるのではないかと考えられる。もっとも、フェラーリが日本を訪れた可能性は現時点では認め難いため、いずれにせよ画家はこうした日本の風俗や風景を写真や版画等の視覚資料を参照して描きあらわしたのである

う。なお、宮内庁に残された本作品の伝来記録には、正確な来歴等は記されていない。また、「四隅ニ唐草模様ヲ置キハケ所ニ葵紋様形ノモノヲ附ス」額縁の形状が作品の来歴の一端を物語っている可能性は否定できないが、この額縁が作品制作当初、もしくは日本に作品がもたらされた当時のオリジナルのものであるという確証がみいだせないため、それ以上の言及はできない。

※ジョ・バッタ・フェラーリについての文献調査、参考資料入手等に当たっては、とりわけイタリア在住の美術史家・石井元章氏の御協力をいただいた。また、本展出品作《農村風景》に関しても同氏から貴重な御教示を得た。

2 ジュゼッペ・ウゴリーニ [1826～1897]

締盟國元首肖像

- ①露西亞皇帝(ロシア皇帝:アレクサンドル二世)
- ②和蘭皇帝(オランダ国王:ウィレム三世)
- ③英吉利皇帝(イギリス女王:ヴィクトリア)
- ④葡萄牙皇帝(ポルトガル国王:ルイス一世)
- ⑤獨逸皇帝(ドイツ皇帝:ヴィルヘルム)
- ⑥白耳義皇帝(ベルギー国王:アルベール一世)
- ⑦伊太利皇帝(イタリア国王:ヴィットリオ・エマヌエーレ二世)
- ⑧丁抹皇帝(デンマーク国王:クリスチャン九世)
- ⑨瑞典皇帝(スウェーデン国王:オスカル二世)
- ⑩澳地利皇帝(オーストリア皇帝:フランツ・ヨーゼフ二世)
- ⑪佛蘭西大統領(フランス大統領:パリス・ドゥ・マクマホン)
- ⑫瑞西大統領(スイス大統領:ヤコブ・シェラー)
- ⑬秘露大統領(ペルー大統領:マヌエル・パルド=イ=ラバッリエ)

1875年
油彩・カンヴァス 各99.5×84.5
当館蔵

※⑬亞米利加合衆國大統領(アメリカ大統領:U.S.グラント)は御物として現存しているが、本展には出品しない。

レッジョ・エミーリアに生れたウゴリーニは、八歳年上の同郷の画家アントニオ・フォンタネージと同じく、優れた芸術家、教師であったプロスペロ・ミンゲッティに師事した。その後、ミラノを主要な活動拠点としたウゴリーニは、肖像画の分野で卓抜した才能を発揮し、19世紀イタリアを通じてもっとも著名な肖像画家のひとりとして数多くの貴人、有力者たちの姿を描き写したことが知られている。

こうしたウゴリーニの名前は、今日では本国イタリアのみならず、日本近代美術史のなかでも比較的なじみ深いものとなってい

る。それは、なにもウゴリーニが明治期の日本で御雇外国人として活動し、当時の美術界に影響を残したためではない。改めていうまでもなく、ウゴリーニ自身は一度も日本の地を踏むことはなかった。しかし、彼が内田九一撮影の明治天皇・皇后の肖像写真(明治6年)にもとづいて1874年(明治7)に座像の肖像画を制作し、それらが日本にもたらされたことを知った高橋由一が両作の摸写を切望したものの許しを得られなかったことが、明治美術・写真史上きわめて有名なエピソードとして伝わっているのである。しかも、その後の1878年にウゴリーニは再度内田の肖像写真に従って七分身立像の明治天皇・皇后像を描きあらわし、ブロンズ製の明治天皇胸像とともに帝室に献上するが、翌年に今度は元老院が高橋由一に明治天皇の肖像画制作を命じることとなり、結果として、高橋はウゴリーニの新作の明治天皇の肖像画を参考としつつ自作を制作完成させることになるのである。

ところで、このような明治天皇・皇后の肖像画制作をめぐる高橋由一との関係とともに、ウゴリーニの名前を明治の歴史のなかで忘れ難いものとしているのが、明治7年当時の日本が条約を締結していた「締盟國たる露西亞・和蘭・英吉利・葡萄牙・獨逸・白耳義・伊太利・丁抹・瑞典・澳地利十箇國現皇帝の肖像及び亞米利加合衆國・佛蘭西・瑞西・秘露四箇國大統領の肖像描畫」を「宮中に掲揚せん」(『明治天皇紀』)とする計画を受けて計14点の肖像連作を制作、1875年に完成納品させたことであろう。この各国元首の肖像画を宮中の一室に展示しようとする計画は、これら14点とともに「聖上 皇后宮尊影モ御臨列被為成候ハ一真ニ宇宙之御盛殿トモ奉存」(明治7年11月4日付記録)という、「世界を元首の集合体として表現しよう」と(多木浩二『天皇の肖像』岩波新書 1988)する発想にもとづくものであった。

各国元首の肖像画連作制作の計画がいつ頃から誰の構想により具体化しはじめたのかについて、詳しいことは不明である。しかし、宮内庁内外に残されたさまざまな外交関係等の文書記録を調査したかぎりでは、少なくとも明治7年初春までには企画決定がなされ、外務省からイタリアのヴェネツィア在勤総領事・中山讓次に計画の意図が伝えられるとともに、中山の責任において適切な画家の候補者を見出すことが命じられたことがわかる。その後、中山はヴェネツィアからミラノへと任地を転じたのにもない、ミラノで本格的に候補者を探すことを決心した矢先、「有名の画工ウゴリーニと申もの當館相借家中に住居憩意と相成候間同人画場へ相越一見仕候處各所から注文の額画中魯伊兩帝の像ともに落成いたし居り良好と見受」、早速に内々の制作依頼をおこなった旨を4月19日までに外務省に報告する。その内容は同日中に宮内省に伝えられ、宮内省では22日付で中山にこの件を一任する旨と「各国徽章ヲ彫刻」した額縁の製作もあわせてミラノですすめるよう返答している。その後、ウゴリーニが各国政府に対して元首肖像の礼装姿の写真資料を請求しはじめる一方、中山はウゴリーニと日本

政府の間に立ち、「画工料」や完成期日、額縁のデザイン等のさまざまな件について打合せを重ねていく。しかし、実際には、ウゴリーニはすぐには制作に着手しなかったらしく、7月31日付で宮内省は外務省に対して「画工未タ着手為無之模様」について不満の意を伝えていることが確認される。中山がイタリアでの勤務を終えて帰国したのは、それから約3ヶ月弱のちの10月17日のことであり、11月4日には中山は帰朝報告の謁見を許されている。そして、こののちほどなく、中山はウゴリーニの描いた明治天皇・皇后の肖像画一対を献上する。以上の経緯から推測すると、ウゴリーニがなかなか各国元首の肖像制作に取り組むことができなかった理由のひとつは、あるいは中山が発案したと伝えられている天皇・皇后それぞれの肖像制作を優先したためであったのではないかと考えられる。いずれにせよ、ウゴリーニの制作が本格的にすすむようになったのは、その後のことであつたらしく、ようやく明治8年(1875)3月に一応の完成をみることとなり、イタリアの新聞記事[資料1]が伝えるようにミラノで一般公開されたのち、少なくとも同年7月中までには、1875年当時在位在任中であつた最新の顔ぶれの各国元首の肖像画連作が予定より約「5~6ヶ月遅」れで日本に到着することになったのである。

3 アッキレ・サンジョヴァンニ[生没年不詳]

締盟國元首肖像

①伊太利皇帝(イタリア国王:ウンベルト一世)

②亞米利加合衆國大統領(アメリカ大統領:R.B.ヘイズ)

1880年頃

油彩・カンヴァス 各99.5×84.5

当館蔵

明治9年から工部美術学校教師をつとめたアントニオ・フォンタネージがイタリアに帰国したのは明治11年のことであり、その後任となったのが、素性の怪しいフェレッティであった。アッキレ・サンジョヴァンニは、このフェレッティの悪評が高まったため、彼に代わる有為の人材として招かれた人物であり、明治13年の契約後16年の同校校校にいたるまで数多くの生徒たちの指導にあたり、曾山幸彦、堀江正章ら油画家たちを育成した。また、この間の明治14年の第2回国勸業博覧会には《人物画》《風景画》を出品している。風景画を得意としたフォンタネージとは対照的に人物画や肖像画に秀で、明るい色調を画風の特徴としたといわれるサンジョヴァンニではあるが、帰国に際して作品のほとんどを持ち帰ったと伝えられることから、国内に現存する作品は、これまでは《山尾忠次郎肖像》(明治14~15年頃)などほんのわずかな例

が知られるに過ぎなかった。また、サンジョヴァンニ自身の経歴についても詳細不明とされてきたが、美術史家の井関正昭氏の調査により未解決の事跡があきらかになりつつあるという。氏の調査成果の発表がまたれる。

本展で紹介する2点の肖像画は、おそらくはウゴリーニの14点の肖像画連作の差し替え作品として制作されたものと考えられる。ウゴリーニの連作が宮中に納められた1875年(明治8)以後、まずアメリカ合衆国大統領が1877年にU.S.グラントからR.B.ヘイズ(在任：～1881)へと代わり、ついでイタリア国王が1878年にヴィットリオ・エマヌエーレ二世からウンベルト一世(在位：～1900)に移っている。本展出品作はまさにこの二国の新元首を描きあらわしたものであり、その制作年は、在位在任期間から単純に考えれば、1878年から81年の間と推定される。ただし、作者のサンジョヴァンニと明治政府の関わりを考慮するならば、やはりサンジョヴァンニが工部美術学校の教師の契約を結んだ明治13年、すなわち1880年以後81年までのこととするのが妥当であろう。あるいは、これら2作は、サンジョヴァンニを採用するにあたっての選考材料として制作、提出させたものなのかもしれない。

ただし、上記の推測が正しいと仮定したうえで、さらに指摘しておく必要があるのが、ウゴリーニの肖像連作の差し替えは、この1880年前後の時点ですら決して徹底的におこなわれたわけではなかったということである。なぜならば、スイス大統領のヤコブ・シェラーは1875年の一年間のみの在任で終わったほか、ペルー大統領もまた交代するなどアメリカ、イタリア以外にも本来ならば差し替えを要する元首肖像があったにもかかわらず、それらの新画像制作が推進された形跡は一切見出だせないからである。そして、以後は、いかなる国の元首の交代にあたって、差し替え作品の制作が企画実行されることはなかったのである。

4 エンリコ・コールマン[1846～1911]

牧馬

1870年頃
油彩・カンヴァス 88.7×103.4
当館蔵

イギリス人の父チャールズ・コールマンとイタリア人のモデルであった母マリア・セガトーリの息子として生まれたエンリコ・コールマンは、国籍こそイギリスにあったものの、終生ローマを本拠地に幅ひろい活動を展開した近代イタリアの画家である。優れた版画家である父から絵画技法を学んだコールマンは、主に水彩画の分野で活躍し、ローマ水彩画家協会会員、〈自由芸術協会〉会員、〈ローマ

ナ地方の25〉協会会長としてイタリア国内の主要な展覧会に出品を続けた。また、このほか1878年以降は王立ベルギー水彩画家協会名誉会員に推挙されて同協会展に出品参加するとともに、ロンドンで開催された展覧会等にも出品している。1902年にサン・ルカ・アカデミー会員となる一方、ローマの美術学校で後身の指導にもあたり、パステル画家のジョルダノ・ブルーノ・フェラリを育成した。コールマンは、水彩画のほかにフレスコ画と油彩画も手がけたが、フレスコ画の場合を除いては、動物を画面に配したローマ近郊の田園風景を主要なモチーフとして制作することが多く、ことに馬の描写には卓越した技量を発揮した。その作風は、灰色と藍色を配色の基本としつつ、隠健な自然主義の態度で対象をとらえる写実性の色濃いものであった。

本作は、こうしたコールマンの画風を典型的に示す一点で、ローマ地方の輝く日の光のもとに群馬が走りゆくさまを生き生きとした躍動感をそなえて、巧みに描きあらわしている。正確な来歴は不詳であり、画面にも向かって右下隅にサインと制作地名のRomaのみが記されていて年紀を欠く。しかし、宮内庁に伝わる記録のなかに、本作のオリジナルの額裏にかつて貼付されていたローマの額縁製造業者による製造証明票の写しが残されており、その記述内容から、少なくとも1870年には制作完了後の本作に合わせて特注品の額縁が製造されはじめたことが確認される。

※エンリコ・コールマンについての文献調査、参考資料入手等にあたっては、とりわけ美術史家・井関正昭氏の御協力をいただいた。

5 オーギュスト・ロダン[1840～1917]

うちひしがれたキャリアティード(旧題：女像置物)

1880～81年
ブロンズ D22.0×W25.0×H43.0
当館蔵

《うちひしがれたキャリアティード》は、近代フランスの代表的な彫刻家ロダンが1880年に制作に着手した大作《地獄の門》を構成する一部分にあたる。《地獄の門》全体のなかでは、向かって左側の柱頭上の壁龕内に配されているが、この石の重みに耐え続ける女体像の大部分は布地をかたどった重厚なヴェールに覆われているため、《地獄の門》を見上げた際には、その存在に気づくことはほとんどないであろう。しかし、ロダンはこのように、大作中の登場人物を洞窟のようなくぼみのなかに閉じ込めて表現することが珍しくはなかった。その理由は、完璧な形態の肉体にみなぎる内的充足感は閉塞された状況のなかでこそ強調されるとロダンが考

えたためではないかといわれている。

カリアティード(女人像柱)は、本来は古代ギリシア、ローマの西洋古典建築やそれらに学んだ新古典主義建築で柱の代わりに用いられた女人像を指すが、ロダンの《うちひしがれたカリアティード》では、建造物中の梁を支える役割は担わされておらず、肩にかぶさる石の重荷に打ちひしがれたようにみえながらも、ひたすら過酷な運命を耐え忍んでいる単独の女性像としてかたちづくられている。それは、詩人のリルケがこの作品について評したように、見果てぬ夢を抱くのと同時に自らの重荷を背負い、しかもそこから逃れることはできない人間の生き方を象徴的にあらわしているのである。その意味では、本作はロダンが彫刻を通じて表現し続けた運命と闘う悲劇的な人間の姿というテーマをもっとも典型的に造型化した一作といえよう。

《地獄の門》の完成後、そこに組み込まれた人物像のなかから有名な《考える人》や《私は美しい》、《美しかりじオーミエール》などが自立した彫塑作品として鑄造されることになるが、《うちひしがれたカリアティード》もまた、同様の経緯をたどり、ヴェールから歩み出して独立の作品として扱われるようになった。当館が収蔵する本作はそのうちの一体であり、大正10年(1921)に「佛國巴里在留日本人會」から献上されている。ジャマ部内側に「M. A. Rodin」の陽刻が、外側背面に作者のサイン「A. Rodin」と鑄造銘「Alexis. Rudier / Fondateur. Paris」の陰刻が鑄出されているほか、ジャマ側部に「奉献 佛國在留日本帝國臣民一同大正十年六月」との文字が刻まれている。

6 国立セーブル製陶所

台付花瓶

1882年

陶磁 D26.0×H52.0

当館蔵

フランスの代表的な磁器工場である国立セーブル製陶所の歴史は、もともとヴァンセンヌにあった王室の援助を受ける製陶所がセーブルに移転した1756年にはじまった。その後、1759年にフランス王立製陶所となり、さらに第三共和制が布かれたのちの1871年以降は国有化されて今日にいたっている。本展で公開する3点のセーブル磁器は、すべてこの国立セーブル製陶所に名称を定めて以後の近代の製品であるが、そのうちもっとも古い年紀を持つ本作は、とりわけ古風な伝統的形狀を特色としている。細部の凝った装飾もきわめて精緻にかたちづくられており、発色も全体にむらが少ない高品質な一作といえる。明治31年(1898)に侯爵の大山

巖が献上したとの伝来記録が残されている。

7 国立セーブル製陶所

菊銀杏文花瓶 一对

1908年

陶磁 各D40.0×H65.0

当館蔵

この一对の花瓶は、大正13年(1924)の皇太子(のちの昭和天皇)御成婚の御慶事をお祝いしてフランス大統領から贈られたものである。窯印に記された年紀が示すように製作されたのは1908年のことであり、必ずしも御慶事に合わせての新たな特別注文というわけではない。しかし、銀杏の葉の上に帯状に群れ咲く小菊の花々はいかにも日本的な情感を生みだしており、日本の帝室の祝典に対する贈答品としてふさわしい趣をたたえている。おそらくは、何らかの日本の美術工芸品を参考として製作されたものなのであろう。幾何学性の強い菊花や銀杏の葉の配置、微妙な中間色を生かした色調などには、のちのアール・デコ期のセーブル作品の様式的な特色を予告させるところがあり、興味深い。胴下部に残されたモノグラムからC.ピアンが絵付けのデザインをおこなったことが確認される。ちなみに図様やデザインの様式性こそまったく異なるものの、全体の器形や台座の形状、絵付けのデザイナーが共通する本来一对の《藤花文大花瓶》(1911)が、現在東京都庭園美術館(旧朝香宮邸)と鍋島報効会に分蔵されている。

8 国立セーブル製陶所

白熊文花瓶

1920年

陶磁 D18.5×H45.5

当館蔵

重なり合う白熊の群れが、釉薬の盛り上げによる巧みなレリーフ的技法を用いて遠近感豊かに表現された作品である。そして、この絵画的図様部分と直線を強調した様式性の色濃い植物文様のコントラストも本作の見所のひとつといえる。白熊はエキゾチックなモチーフのひとつとして、南洋の動植物や風俗などともにアール・デコ期にはさまざまな美術工芸家により好んでとりあげられていたものであった。一方、直線的幾何学的なパターンが、

アール・デコ期の装飾美術品を特色づける造型要素のひとつであることはいうまでもない。その意味で、本作はアール・デコ期のセーブル磁器のひとつの原点を典型的に示しているといえよう。絵付けデザインをオラス・ビューヴィルがおこなったことが、サインから確認される。なお本作は、大正10年(1921)にフランス大統領から献上されたものである。

9 国立ゴブラン製作所

扇形衝立

1918年
染織・木 W113.5×H110.0
当館蔵

大正14年(1925)にフランス大統領から大正天皇の御成婚25年のお祝い品として贈られた暖炉用衝立である。ゴブラン織画面の向かって左下隅に、主にテキスタイル・デザイナーとして活躍したロベール・ボンフィスのサインが織り込まれている。様式的には、まだアール・デコ期のボンフィスの作風の特色を充分には示していないが、ややプロポーションの引き伸ばされた女性の形態やヤシの木の葉の幾何学的な形象には、その萌芽がうかがわれよう。ちなみに、本作のモチーフとなっているのは、ワトーやブーシュ、フラゴナールら18世紀フランスの画家たちが数多く画題とした屋外での恋のたわむれの情景である。こうしたロココ的なモチーフへの回帰現象は、1920年代のフランス美術のひとつの特色でもあった。

10 パヴェル＝オシポヴィッチ・コワレフスキー[1843～1903]

兵士の休憩(旧題：雪原野ロシア軍隊休憩の図)

1896年
油彩・カンヴァス 90.0×145.5
当館蔵

カザンに生まれたコワレフスキーは、サンクト・ペテルブルクの美術学校に学んだのち、おもにキエフで制作活動を展開したロシアの画家である。その作風は手堅い写実描写を基調とするアカデミックなものであり、とりわけ軍人の群像や戦闘の情景描写に卓抜した技量を示したため、今日では一般に19世紀ロシアの代表的なアカデミズム系戦争画家としてのみ名前が記憶されている。

しかし、その一方では、乗馬や狩、そり、馬車などをモチーフとした明るく庶民的な、躍動感あふれる風俗画も好んで描きあらかわした。

本作は、こうしたコワレフスキーのふたつの制作方向のうち、戦争画家としての側面を伝える一点であり、昭和7年(1932)から11年にかけて在ソ連特命全権大使をつとめた大田為吉が帰朝報告の折に献上したものである。

11 ボリス・クストージェフ[1878～1927]

ヴォルガ河畔の乙女

1916年
油彩・カンヴァス 210.0×239.0
当館蔵

クストージェフは郷里のアストラハンで美術を学びはじめ、その後サンクト・ペテルブルクの美術学校でレーピンらに師事したのち、1904年からフランスとスペインに留学した。また、1907年から17年にかけては、イタリア、オーストリア、フランス、ドイツ、スイス、フィンランドを訪遊している。1904年の〈新美術家協会〉設立に参加したほか、〈芸術世界〉、〈ロシア美術家同盟〉、グループ〈16〉のそれぞれ会員にも名を連ねた。その作風は、当初は師レーピンゆずりの写実的な性格が色濃いものであったが、やがて素朴なロシアの風俗を主なモチーフとして、単純化された形態と明るい色彩、演劇的な構図を特色とする装飾美に満ちた独自の絵画世界をあらわすようになった。

《ヴォルガ河畔の少女》は、こうしたクストージェフの円熟期の画風をよく示す代表作である。昭和3年(1928)に当時のソヴィエト共和国連邦政府から御大礼奉祝品として献上されたことが、伝来記録により確認される。

12 エードヴァルド・ハルド[1883～1980]

(制作：オレフオッシュ・ガラス工場)

蓋付壺

1923年
ガラス・エングレーヴィング D25.0×H44.5
当館蔵

1898年に設立されたオレフオッシュ・ガラス工場は、スウェー

デンのさまざまなガラス工場のなかではもっとも早い時期の1910年代から芸術性の高いガラス作品の将来を見抜き、この分野を開拓してきた会社として知られる。エードヴァルド・ハルドはこのようなオレフォッシュ・ガラス工場に職人としてではなく、芸術家としてはじめて採用された人物のひとりであった。

本作は、大正12年(1923)に新婚旅行で来日した当時のスウェーデン皇太子(のちの国王グスタヴ六世)が国王グスタヴ五世からの贈り物として日本の皇太子(のちの昭和天皇)のもとに届けた品である。本体胴部にグスタヴ五世の紋章があしらわれ、蓋部には王冠型のつまみが付いている。

13 フランソワ・パイク [1890～1960]

ローマ聖ピエトロ大聖堂

1921年
油彩・カンヴァス 190.0×155.5
当館蔵

14 アルベール・パケ [生没年不詳]

フォレスト遊園の雪景

1922年
油彩・カンヴァス 46.1×38.4
当館蔵 [旧秩父宮家コレクション]

参考図版1 エルマン・リシール [生没年不詳]

岩上の婦人

1922年
水彩・紙 34.2×49.7
当館蔵

参考図版2 V.ピレンヌ＝ケペンヌ [生没年不詳]

アゼー城の入口

1922年
油彩・カンヴァス 55.0×46.2
御物

参考図版3 ジャンヌ・ヌージャン [生没年不詳]

リエージュの街

1922年
銅版・紙 本紙56.5×41.0 画面38.0×29.5
御物

今回初めて公開するフランソワ・パイク《ローマ聖ピエトロ大聖堂》とアルベール・パケ《フォレスト遊園の雪景》、それに本図録に参考図版として作品全図を掲載したエルマン・リシール《岩上の婦人》(参1)、V.ピレンヌ＝ケペンヌ《アゼー城の入口》(参2)、ジャンヌ・ヌージャン《リエージュの街》(参3)の計5点は、いずれも大正13年(1924)11月に開催された〈白耳義国作家寄贈絵画展覧会〉の出品作品である。それぞれの作者は、今日ではなじみの薄い画家たちばかりであるが、それ以上に、同展開催の事実自体もこれまでの日本近代美術史ではほとんど忘れられていたといえる。もっとも、この展覧会は、前年に起こった関東大震災後の日本を援助する目的でベルギーの画家たちが自作を提供した134点からなる、実質的には展示即売会であったため、当時ですら、美術ジャーナリズムもほとんど関心を向けてはいなかったのである。

ベルギーの美術家たちによる日本への援助活動が進展しつつあることをはじめて正式に日本へ伝えたのは、大正13年8月1日付の在ベルギー日本大使館から外務省への報告文書であった。それによれば、はじめリエージュの美術家たちの間からはじまった自作提供の動きはほどなく全国的な運動となり、アントワープにはすでに134点の美術品が集められていた。そして5月14日から18日にかけて、これらを一般公開する展覧会が個人の邸宅を会場として開催されるとともに、地元の鑑定家により各出品作品の市場評価額も定められた。このような報告を受けて、日本では震災復興を推進していた内務省社会局が作品取り扱いの責任窓口にあたることになり、日本に到着した全作品を即売するための準備がはじめることになる。もっとも、この点では、どうやらベルギーの美術家たちと日本の受け入れ組織側の間では、多少の考え方の相違があったものらしい。ベルギー側は、たとえばレオン・フレデリックやエミール・クラウス、エミール・バース、クルテンスら巨匠たちの作品のみは博物館等の公共機関に収蔵してもらうことができると希望していたようであるが、日本側では、とにかく全作品を高値で完売することだけを念頭に置いて受入れ準備を進めていたのである。そのため、内務省社会局では作品の日本到着までの間に全作品の価格設定作業を繰り返しおこなっていた[資料2]。

ともあれ、全134点を公開、展示即売する〈白耳義国作家寄贈絵画展覧会〉は、大正13年11月15日に招待客2,000人を集めてプレビューを開催し、翌16日から22日にかけて一般公開されることとなった。その結果、21日付『時事新報』紙が伝えるように、出品作

のほとんどが「全部賣切れ」、「社会局はホクホク」となったのである。また1セット30枚入りの作品絵葉書セットや出品目録[資料3]も飛ぶように売れたという。入場者は招待客を除いて約35,000人、作品売上げ総額は22,635円であった。このうち皇室および皇族による御買上げ点数は総計45点であった。そのなかで現時点までの調査過程で現存が確認されたのが、今回紹介する5点である。ただし、これらの作者のうち、今日でも美術史に名前が残るのは、フランソワ・パイクひとりといってよい。

パイクは、ガンに生まれた画家で、同地の美術学校で学んだのち、風景画、人物画、静物画の各分野で活躍した。その作風は、《ローマ聖ピエトロ大聖堂》からもうかがえるように、ややフォーヴィックなタッチと、光の効果を生かした画面構成を特色としている。

15 ヴァル・サン＝ランベール・クリスタル製作所 赤被ガラス花盛器

1924年
ガラス・赤色ガラス被せ・カット D36.0×H39.0
当館蔵

1825年創業のヴァル・サン＝ランベール・クリスタル製作所は、ベルギー国内最大のクリスタル・ガラス製作会社というだけでなく、今日では、カット技法、エングレーヴィング技法の両面できわめて高品質の製品を生みだしている世界的にもトップ・クラスのメーカーとしてひろく知られている。

本作品は、大正13年(1924)の皇太子(のちの昭和天皇)御成婚の御慶事の際に、ベルギー国王から贈られた品である。豊かな胴部のふくらみとカット・デザイナーのユベール・ファルジュによる凝ったカット・デザインの組み合わせが、さながら王冠を想起させる豪華なフォルムをかたちづくっている。まさに風格あふれる一点である。

16 ヴァル・サン＝ランベール・クリスタル製作所 赤被ガラス花瓶

1928年
ガラス・赤色ガラス被せ・カット D24.5×H56.5
当館蔵

昭和3年(1928)の御大礼奉祝品として、ベルギー国王から贈られた作品である。胴部には、きわめて切れの深いカット・デザインが施されており、製作者の高度な技量がうかがわれる。

※ヴァル・サン＝ランベール・クリスタル製作所についての参考資料入手にあたっては、とりわけガラス工芸史家・水田順子氏の御協力をいただいた。また、2点の本展出品作に関しても同氏から貴重な御教示を得た。

17 ドイツの工房? 台付花瓶 一對

1939年
陶磁 各D31.5×H44.0
当館蔵

この一對の花瓶は、昭和14年(1939)に当時のドイツ政府から献上された。均一でむらのないなめらかな焼肌を特色とする、きわめて完成度の高い作品である。また、その形状は、端正な古典的造型性を特色とする第三帝国時代の美術工芸の様式をよく反映したものとなっている。左右それぞれの胴部には、ドイツの歴史的建造物(向かって左側の方は、ブランデンブルク門)が描きあらわされている。

『Corriere di Reggio Nell' Emilia』紙の掲載記事——レッジョの美術

近いうちにここミラノで、各国の指導者たる三人の皇帝、三人の大統領、七人の王という顔ぶれの計十三名の貴人たちの姿を一般の人々が目にすることができるようになるであろう。

この機会は、三人のミラノの婦人とひとりの男性、そして日本の天皇陛下のおかげで得られるものである。

在イタリア大使であった中山閣下が、かつてミラノで優れた肖像画家を探し求めていたことがあった。その調査の過程で閣下は、著名な肖像画家であるウゴリーニの名前を人々から教えられた。ウゴリーニは優れた技量をそなえているので、その作品は写真以上にモデルの真に迫っている。容貌は完璧に写しとられ、服装やアクセサリは細部にいたるまでこと細かく描きだされる。しかもウゴリーニの仕事は早い。必要な場合には1回だけモデルにポーズをとってもらうが、あとは写真を参考にして油彩で作品を完成させることができる。

ウゴリーニは以前に中山閣下の肖像を描いたことがあった。閣下がその作品を日本に持ち帰り、天皇陛下にご覧にいらしたところ、陛下はそのできばえに驚かれた。そこで陛下は、御自身の肖像画とともに、皇后陛下の肖像画もウゴリーニに描いて貰うよう御希望された。さらに、日本が条約を締結しているヨーロッパ、アメリカの国々の指導者たちの肖像作品の制作をも御命じになられたのである。

参考にする写真が手に入るとただちに、ウゴリーニの制作は開始された。現在まだ着手されずに残されているのは、ブラジルの皇帝の肖像だけである。日本の天皇、皇后両陛下それぞれの御肖像は、すでにお手元に届けられている。それ以外のヨーロッパ、アメリカ各国の元首たちの肖像画もすぐにも日本に送り出す手筈が整えられている。そして、このたび日本に作品を発送する前に、これらの卓抜な肖像画連作を一般の人々に向けて展覧することになったわけである。この展覧会で得られた観覧料収益は、ミラノの女性職業訓練学校に寄付されることになる。その意味でも、本展は、新しいかたちの展覧会といえるのである。

このたびの肖像画連作の作者としてウゴリーニが選ばれたのは、適切なことであったとわれわれも思っている。なぜならば、厚塗と派手な色彩を特色とする最近の画家たちの作風は、日本では受け入れられにくいと考えられるからである。その点、ウゴリーニの芸術は、絵画の正攻法をくずすことのない、穏健で品格のある堅実なものである。ウゴリーニの筆使いはきわめて巧みで、さまざまな太さの描線を自在に引くことができる。そのタッチは革新的なりアリズムの描法などには目もくれていないものなのである。こうしたウゴリーニの作品は、おそらく貴族の家の壁面にも、外交官の家の壁面にも無理なく調和するに違いない。

(中略)

今回の展覧会開催を通じて、日本の天皇陛下の御友人であるこれらの各国元首たちが、女子職業訓練学校のふたりの女性運営者のもとに観覧料収益をもたらすことを期待している。

ウゴリーニは、なるべく早くスペイン国王の肖像も手掛けるべきではないだろうか。最近の情報によると、スペイン国王の病状は悪化しているとのことである。

本展は、明日から開催される。(後略)

※ここに紹介するのは、『Pungolo di Milano』紙の記事をそのまま転載した1875年3月11日付の『Corriere di Reggio Nell' Emilia』紙掲載記事の一部を抜粋翻訳したものである。しかし、オリジナルの記事が元の『Pungolo di Milano』紙上にはいつ掲載されたのかは記されておらず、従って、ウゴリーニの展覧会の正確な会期もつまびらかではない。記述のなかには、計14点の肖像画のモデルの人数を「十三人」としていることと(ただし、省略した記事部分では「十四人」と記されているので、単純なミスかもしれない)、中山を領事ではなく「大使」と呼んでいる点に誤りがみられるほか、われわれには未知の「ブラジルの皇帝の肖像」についての言及も意味不明であるが、それを除けば、全体に紹介するだけの価値のある美術史的にも興味深い内容であることは、一読するだけで御理解いただけるに違いない。なお、この記事は日伊文化交流史の研究者リア・ベレッタ氏から御提供いただいたものであり、イタリア語から日本語への翻訳も、まず同氏が翻訳されたのち、大熊が同氏の指示を受けつつ、文章体の日本語に整えるかたちでおこなわれた。

『震災慰問白耳義國美術展覽會目録』(「価格表」最終案)

番號	作家	画題	價格	
			円	法(フラン)
159	バルトロメ	漁船(着色エッチング)	50	200
124	男爵フランス・クルテンス	コクシードの濱	1,500	1,500
117	エルマン・タルテン	徂春	450	1,000
160	アルアン・ジャマール	ガン風景	300	200
22	リュドヴキタ・ジャンセン	ルール河の古き家	300	300
158	マツソン	日本の夜會後(ペン画)	5	58
142	ロドルフ・ワイツマン	和蘭オヴエルスケーの風車(石版画)	30	50
123	ワイツマン夫人	ロッテルダム郊外	500	800
91	某氏	少女の顔	15	50
99	某氏	二少女	25	100
121	ジェルバンド・レーヌ	ボアフォールの秋(グワッシュ)	200	150
32	アルト	婦人の顔(石版画)	20	150
72	マリ・アレクサンドル	風景	15	50
12	アンリ・アンスバック	カーニユの景	100	150
84	エミル・パース	裸体婦人(エッチング)	25	100
11	エミルパース	同(同)	30	150
51	エルミ・パース	同(同)	30	150
81	エミル・パース	裸体婦人	600	800
36	ペ・ブロッケー	頭像石膏	120	250
4	ジョルジュ・バルチユス	人物画(パステル画)	200	1,000
87	ジョルジュ・バルチユス	施し(版画下画)	20	100
23	バランギヤン	牧野	10	25
30	フィルマン・パース	裸体婦人(パステル)	200	500
8	ボーギー	死の脅威(エッチング)	15	30
78	リュドヴキク・ボーエス	風景	50	50
104	パレヴァイン	トマト	50	100
110	パンブス	風景(水彩)	100	100
56	ギョーム・シヤルリエ	牧人(青銅浮彫)	150	1,000
88	アルフレッド・カーアン	殉難の白耳義	500	700
141	エミル・クラウス	池畔の秋色	4,500	10,000
85	ルイ・クレッス	運河	750	2,000
40	ジェラルド・クレーパー	農家	10	30
15	ジャック・カラバン	伊國ナルニの町	250	1,000
19	アドルフ・クレスパン	静物(水彩)	200	500
9	クライスナル夫人	裸体(デッサン)	15	50
59	アリスチード・カベル	レス河の橋	100	100
50	アルベル・クロムリンク	ピエタ	150	100
61	アリーダ・ダーネン夫人	花瓶と花	150	500
13	ジュリヤン・ゼレンス	千八百七十八年のヌーシャテル市(水彩)	25	50
33	アルチュール・ダウア	荒廢地方(石版画板卸し)		300
34	同人	同	250	300
35	同人	同		300
16	ロベール・デザールト	乞食娘(パステル)	150	200
89	ルイズ・デュモン	農家	15	50
39	デイルマン嬢	薔薇と芍薬	150	300
24	ジョセフ・ダミヤン	ピエロ	20	100
107	同人	習作(油繪刺繍)	30	100
138	同人	整容-ユウリトミー(サンギーヌ)	100	500
112	同人	幻惑(寫眞)	5	5
58	アルフレ・ツフィーズ	學者	50	200
64	マルセル・ド・ランセ	ムーズ河口	300	300
117	マルセル・ヅムーラン	三人の少女	15	25
14	フィリップ・デルシヤン	ヴェードルの石切場(クレオン画)	10	50
49	ジャン・ドネー	聖ジャック(エッチング)	40	50
80	ア・デュブール	巴里ボン・ヌフ(同)	20	75
74	同人	巴里ボン・ロアイヤル	10	25
69	デュ・モンソウ伯爵夫人	ルウヴァン市の古い門	150	200
52	アルフレ・チュバーニュ	人物(着色版画)	40	100
98	アンジュリナ・ドリユモ嬢	薔薇(水彩画)	75	150
106	フランツ・ダミヤン(父)	果實	75	150
115	ルネ・ド・ボーニー	雪景	200	300
120	フランツ	小童(パステル)	15	100
140	同人	老婆(同)	15	100
134	フレデリック	風景	1,500	500
38	デユリヌ・ファガール嬢	沙丘まで	120	50
1	フェルナン・ジロン	ソルトー収容所に於ける日本の俘虜	50	300
27	ガンツ	信仰深き女	50	150

番號	作家	画題	價格	
			円	法(フラン)
100	エルザ・ゴレー	三色堇(パステル画)	15	50
92	ジルスール・オップ夫人	花(水彩画)	60	150
20	マルセル・グウセン	ブルターニュの小路	80	20
129	ジャン・ジエラール	糸に志だ	50	100
139	グーツブルーツ夫人	林間(水彩画)	40	50
57	アンドレ・アレー	ブリュッセル市廣場	200	100
90	アーゲマン	子供	80	200
86	リシヤル・エンツ	雨後	150	200
6	エフ・ジョムートン	海岸(水彩画)	150	200
67	同人	風景	100	60
18	リュシヤン・ジョトラン	フランドル海岸の夕	150	150
2	ジョナル夫人	前栽	300	400
28	シャルル・レオナル	習作(木炭画)	50	100
108	エル・ベ	静物	150	50
21	エム・ラントラン	埠頭(水彩画)	150	250
82	ワルゼ・ルメール	婦人の胸像(パステル)	80	100
31	フェルヂナン・レイス	漁舟	50	30
26	ラルマンス	労働者(エッチング)	100	300
73	ア・ライネン	森の中(鉛筆画)	15	100
65	ジョルジュ・ルダン	アウアンスの景色(水彩画)	30	50
103	ルーツ嬢	静物	40	50
68	ジ・ラクローア	十月の景	50	50
119	アルベル・ルメートル	曇り日	150	400
54	ジャール・ミシエル	日の出	250	500
47	マルグリト・モンマン夫人	花卉	250	300
93	同人	葡萄牙の海岸	25	50
43	マジュイ・カストリック	ロンドンブリッチ(石版画)	25	60
46	マツソネ	負傷兵(石版画)	30	100
25	同人	癡兵(石版画)	30	100
45	オーギュスト・マンゾール	ポルルン教會堂	150	50
75	アルフレド・マルタン	アルレの景(パステル画)	100	300
70	ボル・フランソア・マチュー	トレーマ・ロエンの崖	500	300
143	ア・マクロ	自画像	50	50
111	ルイズ・ムーンズ嬢	彩文様	30	100
44	ジャンヌ・ヌージャン夫人	リエージュの街(エッチング)	40	75
71	エレヌ・エーヴ夫人	アルデンヌの暮色	250	400
116	エル・ノレンス	労働者(木炭画)	40	50
60	ジャック・オックス	デッサン	50	150
94	マルグリト・ド・ポールク	ブリュージュの礼拝堂	50	100
41	アルベール・バケー	フォレスト遊園の雪景	50	50
3	パイク	羅馬聖ピエトロ大堂	550	1,000
10	バスキエ嬢	婦人の肖像	350	500
37	バルマンチエ	サロメ	500	500
29	ポーリュス	フォンタラベ	75	250
60	ヴェ・ビレンヌ・ケベンス夫人	アゼー城の入口	100	150
48	モーリス・ビレンヌ	裸体習作	15	25
17	ア・ラチ	黒い家	100	100
53	アルマン・ニッセサンフォ	若き女	150	40
63	ユベール・ランカン	日蔭	100	150
118	アンヌ・リュタン嬢	オスタンドの港	75	100
113	同人	少女	50	100
79	サン夫人	公園(エッチング)	50	300
5	スウァキンコブ	家	150	300
126	フランツ・シャツツエン夫人	スウキートピース	15	100
95	ア・チーレンス	芍薬	350	350
114	ジャン・ツニス	小女(木版画)	5	50
62	ヴェキトル・ヴラウグ・スウート	エスコー谿の雲	50	100
83	ア・ヴェルス・ライス	ビエトレバウスの入口(ペン画)	5	10
76	同人	森の径(クレオン画)	5	10
66	同人	農家の庭(クレオン画)	25	100
55	アルベール・ヴァン・ホルスベーク	花	200	300
42	ヴァンデルミッセン	獅子(青銅)	100	200
125	ヴァン・オート	雪景	70	50
136	ヴァン・ブラバン	風景(水彩画)	30	200
96	ワーゲマンス	習作(石版画)	50	50
105	シャルル・ウエレンス	カンピーヌ茅屋	100	50
102	ヘンマン・リシュール	岩上の婦人	450	800

出品目録

							会期 前期：1月7日(火)～1月26日(日) 中期：1月28日(火)～2月16日(日) 後期：2月18日(火)～3月9日(日)		
番号	作者名	作品名	制作年	技法・材質	サイズ	所蔵	展示期間	図版頁	
1	ジョ・バッタ・フェラーリ	《農村風景》(旧題：農業之図)	1875年	油彩・カンヴァス	89.5×117.5	当館蔵	全期	4	
2	ジュセッペ・ウゴリーニ	《縮盟國元首肖像》 ①露西亞皇帝(ロシア皇帝：アレクサンドル二世) ②和蘭皇帝(オランダ国王：ウィレム三世) ③英吉利皇帝(イギリス女王：ヴィクトリア) ④葡萄牙皇帝(ポルトガル国王：ルイス一世) ⑤獨逸皇帝(ドイツ皇帝：ヴィルヘルム) ⑥白耳義皇帝(ベルギー国王：アルベール一世) ⑦伊太利皇帝(イタリア国王：ヴィットリオ・エマヌエーレ二世) ⑧丁抹皇帝(デンマーク国王：クリスチャン九世) ⑨瑞典皇帝(スウェーデン国王：オスカル二世) ⑩澳地利皇帝(オーストリア皇帝：フランツ・ヨーゼフ二世) ⑪佛蘭西大統領(フランス大統領：ナポリス・ドゥ・マクマホン) ⑫瑞西大統領(スイス大統領：ヤコブ・シェラー) ⑬秘露大統領(ペルー大統領：マヌエル・パルド＝イ＝ラバッリエ) ※⑩亞米利加合衆國大統領(アメリカ大統領：U.S.グラント)は御物として現存しているが、本展には出品しない。	1875年	油彩・カンヴァス	各99.5×84.5	当館蔵	前期 前期 前期 前期 前期 中期 中期 中期 中期 中期 後期 後期 後期	5 5 5 5 6 6 6 6 7 7 7 7 8	
3	アッキレ・サンジョヴァンニ	《縮盟國元首肖像》 ①伊太利皇帝(イタリア国王：ウンベルト一世) ②亞米利加合衆國大統領(アメリカ大統領：R.B.ヘイズ)	1880年頃	油彩・カンヴァス	各99.5×84.5	当館蔵	後期 後期	8 8	
4	エンリコ・コールマン	《牧馬》	1870年頃	油彩・カンヴァス	88.7×103.4	当館蔵	全期	9	
5	オーギュスト・ロダン	《うちひしがれたカリアティード》(旧題：女像置物)	1880～81年	ブロンズ	D22.0×W 25.0×H43.0	当館蔵	全期	10	
6	国立セーブル製陶所	《台付花瓶》	1882年	陶磁	D26.0×H52.0	当館蔵	全期	11	
7	国立セーブル製陶所	《菊銀杏文花瓶》 一対	1908年	陶磁	各D40.0×H65.0	当館蔵	全期	12	
8	国立セーブル製陶所	《白熊文花瓶》	1920年	陶磁	D18.5×H45.5	当館蔵	全期	13～14	
9	国立ゴブラン製作所	《扇形衝立》	1918年	染織・木	W113.5×H110.0	当館蔵	全期	15	
10	パヴェル＝オシポヴィッチ・コワレフスキー	《兵士の休憩》(旧題：雪原野ロシア軍隊休憩の図)	1896年	油彩・カンヴァス	90.0×145.5	当館蔵	全期	16	
11	ボリス・クストージェフ	《ヴォルガ河畔の乙女》	1916年	油彩・カンヴァス	210.0×239.0	当館蔵	全期	17	
12	エドヴァルド・ハルド	《蓋付壺》	1923年	ガラス・エングレーヴィング	D25.0×H44.5	当館蔵	全期	18	
13	フランソワ・バイク	《ローマ聖ピエトロ大聖堂》	1921年	油彩・カンヴァス	190.0×155.5	当館蔵	全期	19	
14	アルベール・バケ	《フォレスト遊園の雪景》	1922年	油彩・カンヴァス	46.1×38.4	当館蔵[旧秩父宮家コレクション]	全期	20	
15	ヴァル・サン＝ランペール・クリスタル製作所	《赤被ガラス花盛器》	1924年	ガラス・赤色ガラス被せ・カット	D36.0×H39.0	当館蔵	全期	22	
16	ヴァル・サン＝ランペール・クリスタル製作所	《赤被ガラス花瓶》	1928年	ガラス・赤色ガラス被せ・カット	D24.5×H56.5	当館蔵	全期	23	
17	ドイツの工房?	《台付花瓶》 一対	1939年	陶磁	各D31.5×H44.0	当館蔵	全期	24	
参考図版1	エルマン・リシール	《岩上の婦人》	1922年	水彩・紙	34.2×49.7	当館蔵	—	20	
参考図版2	V.ピレンヌ＝ケベンス	《アゼー城の入口》	1922年	油彩・カンヴァス	55.0×46.2	御物	—	21	
参考図版3	ジャンヌ・ヌージャン	《リエージュの街》	1922年	銅版・紙	本紙56.5×41.0 画面38.0×29.5	御物	—	21	

Modern Art of Europe-Revaluation of Forgotten Works



January 7 — March 9, 1997
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan

Foreword

The Museum of the Imperial Collections (Sannomaru Shōzōkan) is holding its 14th exhibition, "Modern Art of Europe - Revaluation of Forgotten Works".

During the beginning of the Meiji to early Showa Periods, many western paintings, sculptures and crafts were brought to the Imperial Family and the Imperial Household Agency, as gifts received through Imperial Household diplomacy and auspicious events, and ordered or purchased by the Japanese government or the Imperial Household, along with ancient pieces of Asian and Japanese art, and the various modern Japanese arts. Most of these are modern pieces which were created in the 19th century and later, and a part is presently among our collection.

This exhibition attempts to introduce the pieces among the modern western art in our collection which the artist and date of production are clear and can be considered valuable from an art historical viewpoint, as a result of research.

It is not a systematic collection where the history of European modern art can be viewed, and most of the artists are forgotten from even the history of their own countries, except for a few such as Rodin. However, there are pieces made by artists such as the 19th century Italian painter, Gio Batta Ferrari, and the Russian painter active around 1910, Boris Kustodiev, or the Late Impressionist paintings of Belgium which have been rapidly revalued recently within the art history of each country, and typical pieces showing certain trends of expressions of certain eras. We consider it meaningful to show that our collection includes such interesting pieces, and to exhibit them. We hope you may rediscover the charm of these forgotten pieces of art which were brought to Japan within the history of interchange with Europe.

(Translated by Hiroko Yokomizo)

List of Exhibits

1.
Landscape of farming village
Gio Batta Ferrari, 1875
Oil on canvas, 89.5×117.5
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 2.
Portraits of the Sovereigns of the Treaty Powers
Giuseppe Ugolini, 1875
Oil on canvas, 99.5×84.5 each
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 - 1) Emperor of Russia, Alexander II
 - 2) King of Netherlands, William III
 - 3) Queen of England, Victoria
 - 4) King of Portugal, Louis I
 - 5) Emperor of Germany, Wilhelm
 - 6) King of Belgium, Albert I
 - 7) King of Italy, Victor Emanuel II
 - 8) King of Denmark, Christian IX
 - 9) King of Sweden, Oscar II
 - 10) Emperor of Austria, Franz Josef II
 - 12) President of France, Patrice de MacMahon
 - 13) President of Switzerland, Jakob Scherer
 - 14) President of Peru, Manuel Pardo y Lavalle

*No.11 The portrait of the President of the United States of America, U.S. Grant, is presently among the Gyobutsu (Imperial Properties), but is not included in this exhibition.
 3.
Portraits of the Sovereigns of the Treaty Powers
Acchile San Giovanni, 1880
Oil on canvas, 99.5×84.5 each
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 - 1) Emperor of Italy, Humbert I
 - 2) President of United States of America, R.B. Hayes
 4.
Grazing horses
Enrico Coleman, around 1870
Oil on canvas, 88.7×103.4
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 5.
Grief stricken caryatid
François Auguste René Rodin, 1880-1881
Bronze, D22.0×W25.0×H43.0
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 6.
Vase with base
Manufacture Nationale de Sèvres, 1882
Ceramic, D26.0×H52.0
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 7.
Vase with chrysanthemum and ginkgo design
Manufacture Nationale de Sèvres, painting by C. Pihan, 1908
Ceramic, D40.0×H65.0 each
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 8.
Vase with polar bear design
Manufacture Nationale de Sèvres, painting by Horace Bieuville, 1920
Ceramic, D18.5×H45.5
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 9.
Fan shaped screen
Manufacture Nationale des Gobelins, design by Robert Bonfils, 1918
Textile and wood, W113.5×H110.0
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 10.
Soldiers' rest
Pavel Osipovich Kovalevsky, 1896
Oil on canvas, 90.0×145.5
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 11.
Woman at Volga River bank
Boris Kustodiev, 1916
Oil on canvas, 210.0×239.0
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 12.
Covered Urn
Edward Hald, produced by Orrefors Glasshouse, 1923
Glass, engraving, D25.0×H44.5
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 13.
St. Peter's Cathedral in Rome
François Pycke, 1921
Oil on canvas, 190.0×155.5
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 14.
Snow scene at Forest Park
Albert Paquet, 1922
Oil on canvas, 46.1×38.4
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan [Formerly owned by House of Prince Chichibu]
 15.
Footed bowl
Manufacture de cristaux du Val-Saint-Lambert, design by Hubert Fouarge, 1924
Pink cased glass, cutting, D36.0×H39.0
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 16.
Vase
Manufacture de cristaux du Val-Saint-Lambert, 1928
Pink cased glass, cutting, D24.5×H56.5
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
 17.
Vase with base
German studio?, 1939
Ceramic, D31.5×H44.0 each
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
- Reference plate 1
Women on rocks
Herman Richir, 1922
Water color on paper, 34.2×49.7
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
- Reference plate 2
Entrance of Azay Chateau
V. Pirenne Kepenne, 1922
Oil on canvas, 55.0×46.2
Gyobutsu — Imperial collections (Imperial properties) —
- Reference plate 3
Town of Liège
Jeanne Neujean, 1922
Copperplate engraving on paper, paper 56.5×41.0, picture 38.0×29.5
Gyobutsu — Imperial collections (Imperial properties) —

[謝辞]

本展開催準備にあたり、下記の機関、諸氏に資料提供や調査協力、御教示等をいただきました。記して深く感謝の意を表します。

[Acknowledgment]

Special thanks to the following organizations and people for their cooperation toward the preparation for this exhibition.

外務省外交史料館
厚生省
国立公文書館
国立国会図書館
自治省
在京スイス大使館
東京国立近代美術館
東京国立近代美術館工芸館
東京国立文化財研究所
東京都庭園美術館
在京ベルー大使館
北海道立近代美術館
三菱商事株式会社

石井元章
井関正昭
磯見辰典
大谷省吾
熊本史雄
黒沢文貴
白石仁章
関 昭郎
高波真知子
高橋幸次
田中 淳
都築千恵子
富田 章
樋田豊次郎
古田浩俊
リア・ベレッタ (Lia Beretta)
水田順子
水谷長志
守田 均
山梨絵美子
(敬称略、順不同)

ヨーロッパの近代美術—歴史の忘れ形見

三の丸尚蔵館展覧会図録No.14

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 横溝廣子
発行 宮内庁
平成9年1月7日発行

© 1997, Museum of the Imperial Collections

Modern Art of Europe — Revaluation of Forgotten Works

Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
Exhibition Catalogue No.14

Edited by Museum of Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
Produced by Tokyo Bijutsu
Translated by Hiroko Yokomizo
Issued by Imperial Household Agency
© 1997, Museum of the Imperial Collections

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

ヨーロッパの近代美術—歴史の忘れ形見

三の丸尚蔵館展覧会図録No.14

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 横溝廣子
発行 宮内庁
平成9年1月7日発行
© 1997, Museum of the Imperial Collections

Modern Art of Europe — Revaluation of Forgotten Works

Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
Exhibition Catalogue No.14

Edited by Museum of Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
Produced by Tokyo Bijutsu
Translated by Hiroko Yokomizo
Issued by Imperial Household Agency
© 1997, Museum of the Imperial Collections